

四年制大学における保育者養成教育の成果と課題

—— 保育施設勤務の卒業生調査から ——

上山 瑠津子⁽¹⁾・山田 真世⁽¹⁾・森 美智代⁽¹⁾・山西 正記⁽¹⁾・吉井 涼⁽¹⁾

本研究は、卒業生による教育内容や学習環境に関する評価を通して、本学の養成教育の特徴や強みを明らかにし、これまでの養成教育の成果と今後の課題について考察した。保育コース卒業生のうち保育施設に勤務する10名にインタビュー調査を実施した。その結果、本学で保育を学んでよかった内容や経験の回答から、大学の授業等では、実践性の高い学習内容と保育・教育の理論的な学習内容、加えて学習環境として、コース間、コース内の学生同士の学び合いの機会が提供されていることが示された。実習や実地体験活動では、子どもや保育者と出会い、地域の人材としてつながる契機になっていることが示された。また、保育職に必要な知識・技術と養成教育段階で学ぶべきことの回答から、今後は、入職後に実践的かつ経験的に知識・技術が習得されることを踏まえ、養成教育段階で最低限学ぶべき内容を設定していくことの必要性が示唆された。

キーワード：卒業生、養成カリキュラム、専門的知識・技術、教育内容

問題と目的

保育者の専門性と養成教育

保育の質の向上に関する報告や議論において、保育者養成教育（以下、養成教育）は、現職教育と同様に重要な保育政策課題に位置づけられている（OECD, 2006 星・首藤・大和・一見訳 2011）。養成教育と子どもの発達の間連関については、教育歴の高い保育者が多い保育施設では、質の高い保育実践が行われている（Howes et al., 1992）ことや、保育者の教育歴と子どもの言語発達が関連する（Huttenlocher et al., 2002）ことが報告されている。これらの結果は、保育者の専門性に対する養成教育の重要性を示唆している。保育教諭養成課程研究会（2016）がまとめた幼稚園教諭・保育教諭の成長モデル図においても、養成段階、採用、そして現職段階の3つの区分が示され、養成段階から現職段階へと続く連続的な学習や研修の中で、保育者を育成することが目指されている。

四年制大学における養成教育の現状

日本の養成教育では、1990年代から四年制大学の増設や二年制（短期大学）から四年制（大学）の移行が進んでいる。現在、保育士資格と幼稚園教諭免許両方の取得が可能な養成校のうち、四年制課程の割合は46%に上っている（中西, 2019）。高度な専門性を有する保育者の輩出が期待され、各養成校において理論的・実践的な学びの充実が図られている。しかし、修学年限のプラスが保育者の力量や専門性の向上につながっているのか十分に示されていない現状にある（川俣, 2012；両角・大島, 2018）。丹羽（2011）は、養成校の特色が表れやすい実習（保育所）に焦点を当て、シラバスとテキストの分析を行った。その結果、資格取得のために設定されている学習内容は四年制と二年制で差異はないことを示し、さらなる専門性を高める学習内容の設定は、各養成校に任されていることを指摘している。また、中西（2019）においても、四年制大学ならではの保育者養成カリキュラムの構築は、

⁽¹⁾福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: r-ueyama@fcu.ac.jp

各養成校の努力に委ねられていると指摘されている。

養成教育の教育課程に関しては、2019年に教職課程コアカリキュラムが策定され、教員の資質能力の向上の方針が明確になった。幼稚園教育課程については、「教科に関する科目」が「領域および保育内容の指導法」となり、幼稚園教員養成の独自性が加味された。また「教科又は教職に関する科目」がなくなり、「大学が独自に設定する科目」ができたことで、大学の自由裁量の度合いが増し、どのような保育者を養成するかが各大学に委ねられることになった（清水，2019）。

以上のように、四年制の保育者養成教育における高度な専門職の育成に関しては、各養成校に委ねられている部分が大きく自由裁量も増している。言い換えると、各養成校の特徴や強みを活かした養成カリキュラムの検討が可能になっているといえる。

福山市立大学における保育者養成教育

本学の保育者養成課程も二年制から四年制へと移行した背景を持つ。福山市立大学教育学部児童教育学科¹保育コースは、前身の福山市立女子短期大学における37年間の保育者養成教育の実績を継承し、2011年に公立大学として開学した。卒業生・修了生は、公立・私立の保育士、幼稚園教諭、保育教諭、乳児院や児童養護施設などの社会福祉施設職員、各市町村の行政職員など、修得した専門的知識や技術を活かし、保育・教育分野を中心に活躍している。2021年度時点で、1期生は卒業後6年を経過し、各分野の中堅的な役割を担う人材となっている。開学から11年が経ち、地域との連携を図りながら養成教育を行ってきた本学において、卒業生・修了生は、養成校と保育現場をつなぐ存在になることが期待される。

卒業生調査を通じた養成教育の評価

四年制の保育者養成教育について高度な専門職の育成を目指した保育者養成カリキュラムを考える上で、卒業生・修了生は、これまで提供した養成教育の成果を検証する重要な存在といえる。卒業生の評価から養成カリキュラムの課題について考察した研究として森本・林・東村（2016）がある。森本ら（2016）は、保育現場での実践力に繋げていくための教育課題を見出すことを目的に、大学が実施した卒業生アンケート調査のうち保育従事者の回答を再分析した。その結果、養成段階で学んで良かった内容や保育者として必

要な力などに関する回答から、保育の仕事の実態をイメージ化させるための授業の工夫や、実習以外での授業と実践の統合の場の必要性など、今後の養成教育の在り方について具体的な課題を見出している。これまでに本学保育コース卒業生を対象にした研究としては、高澤・山田・上山・田丸（2018）の研究があるものの、初期キャリアの保育者の成長に焦点を当てたものであるため、養成カリキュラムの課題を見出すためには更なる検討が必要である。

そこで、本研究は、卒業生による教育内容や学習環境に関する評価を通して、本学の養成教育の特徴や強みを明らかにし、これまでの養成教育の成果と今後の課題について考察する。本研究で得られる卒業生による評価は、高度な専門職の育成を目指した保育者養成カリキュラムを検討するための基礎資料となる。

方法

調査対象者 本学保育コース卒業生で保育所、幼稚園、認定こども園に勤務する10名を対象とした（表1）。本文中で対象者を示す場合、「A 7」のように、対象・勤務年数の順で表記した。

調査時期および手続き 2022年2月から3月に、対面またはオンラインによる個別インタビュー調査を実施した。面接時間は60分から90分程度であった。

調査内容 森本ら（2016）では、「本学で学んで社会に出て役立ったもの」、「社会に出てもっと学んでおけばよかったと感じたもの」、「社会人になって必要と感じた力」、そして「保育者として自分に必要だと感じたもの」の4項目から養成校の教育課題を検討している。本研究では、森本ら（2016）を踏まえ、養

表1 調査対象者の属性

対象	勤務年数	担当	園種別
A	7年目	5歳児・担任	公立 幼稚園
B	7年目	一時預かり	公立 保育所*
C	6年目	0歳児・担任	私立 保育所
D	5年目	4歳児・担任	公立 こども園
E	4年目	3歳児・加配	公立 保育所
F	3年目	4歳児・担任	私立 保育所*
G	3年目	フリー	公立 こども園
H	3年目	4歳児・担任	公立 保育所
I	2年目	3歳児・担任	公立 保育所*
J	1年目	4歳児・担任	国立 幼稚園

注）表中の*は福山市内の保育施設を示す。

成教育カリキュラムに焦点化するために、①本学で保育を学んでよかったと思う内容や経験、②保育職に必要な知識・技術、そして③養成段階で学ぶべきことの3つの観点で質問を設定し、大学教育と専門教育の両面から回答を求めた。

倫理的配慮 口頭と文書で調査趣旨を説明し、個人情報保護を遵守し実施することを伝えた上で、研究協力の同意を得た。発話記録からの引用箇所および考察については、調査対象者に確認してもらい、掲載への同意を得た。

結果と考察

1. 本学で保育を学んでよかった内容や経験

初めに、該当する発話内容を大学での授業等、実習、実習先での実地体験活動ⁱⁱの3つの場面に分類し、次に各場面で類似する発話内容をまとめカテゴリー化した(表2)。

3つの場面に共通して語られたのは、「子どもとの関わり」であった。A7は実習を通して、G3は実地体験活動を通して、実際に子どもと関わることで、保育の大変さや楽しさを体験的に経験し、また年齢やその子に応じた関わり方を実践的に学んでいることがうかがえた。

・子どもと関わって、大変だなとか楽しいなみたいなのを実際に感じるができるっていうのがやっぱり大事。(中略) 保育所は私には無理だなと思って。幼稚園に行ったら、(子どもと)

普通に会話も通じるし、楽しいなって思ったところもある(A7さん)。
・4年生になると実習がなくなるんですけど、その4年生に(実習園に)何回も行ったことで現場の雰囲気とか、子どもとの接し方とか記憶に残ったまま(就職して)現場に出ていけたのが良かった(G3さん)。

続いて、場面ごとに回答の多かったカテゴリーを上げ考察する。初めに、大学での授業等では、「保育表現(手遊び・リズム遊び等)」、「学生同士の学び」、「子どもの発達理解と援助」、「保育教材への理解」、「地域行事を通した子どもとの関わり」、そして「保育記録の書き方」に分けられた。回答が最も多かったのは、「保育表現(手遊び・リズム遊び等)」であり、保育経験年数に関わらず、保育実践において役立つ内容であることがうかがえた。森本ら(2016)においても、学んでおけばよかった授業内容として回答者の半数が保育表現を挙げており、集団での遊びや活動の導入で日常的に活用することから必要性が高い学習内容といえる。

・身体表現活動とかは、やっぱり実用的なので現場に行ってすぐに、手遊びにしても運動遊びにしてもすぐに使うことばかりだったので、やっていてよかった(D6さん)。
・(子ども達に)「静かに聞いて」と最初やってみたんですけど、(同僚の先生に)「そりゃ聞かないわ」って言われて。大学で習った手遊びをやっ

表2 本学で保育を学んでよかったと思う内容や経験

場面	カテゴリー	A7	B7	C6	D6	E4	F3	G3	H3	I2	J1
大学での授業等	保育表現(手遊び・リズム遊び等)	○	○		○	○			○	○	○
	学生同士の学び			○	○	○		○	○		
	子どもの発達理解と援助	○		○						○	
	保育教材への理解		○								
	地域行事を通した子どもとの関わり									○	
	保育記録の書き方										○
実習	子どもとの関わり	○	○							○	
	憧れる保育者との出会い		○				○				
	地元での関係づくり		○				○				
	基本的な態度							○			
	失敗の経験										○
実習先での実地体験活動	子どもとの関わり							○			
	実際の保育者の姿				○						
	園生活の流れの理解				○						

たら結構子どもがやってくれて、そこから話を進められた (J1さん)。

次に回答が多かったのは、「学生同士の学び」であった。C6からは、教育コースの学生との学びの機会について語られ、保育士・幼稚園教諭を目指す学生と小学校教諭を目指す学生がともに学ぶことで、学習内容や教育方法の違いを知る機会になっていることがうかがえた。また、H3からは、学年の人数やそれに伴って実習先に複数名で配属されたことが、学生同士の支え合いの機会になったと語られた。

- ・ゼミでは教育コースの子たちと関わることもあって、すごくそれが良かったな。先輩も同じ学年の子ども、幼児教育のような子どもの興味から出発する教育の体系と、今の小学校のカリキュラムの体系との違いにすごく疑問とか(持っていて)、(小学校との)その違いも知ることができたし (C6さん)。
- ・仲間がたくさんいたこと。保育コースで50人規模ってなかなかないですよね、公立(大学)は。(中略) 実習も必ず2人以上行ったじゃないですか。それもすごく心強かった (H3さん)。

続く「子どもの発達理解と援助」は、A7, C6, I2の3名から語られた。特にA7とC6は、それぞれ卒業後7年と6年が経過している。保育実践を積み重ね、具体的な子どもの姿を通して子どもの成長過程や行動について理解を深めて行く中で、大学で学んだ内容があらためて関連づけられていることがうかがえた。

- ・最近になって思うのは、やっぱり子どもの成長過程というか(中略)、あのとき学んだのはこういうことかみたいなのがちょっと分かってきた (A7さん)。
- ・保育内容「言葉」の授業で、指さしとか声にならない表出の段階から大人が応答的に関わるのが、子どもの伝えたいっていう意欲につながるっていう授業をうかがったのが印象的で。(中略) すごく大切だなって実践してても思う (C6さん)。

次に、実習では、「子どもとの関わり」、「懂れる保育者との出会い」、「地元での関係づくり」、「基本的な態度」、そして「失敗の経験」に分けられた。そのうち、「懂れる保育者との出会い」では、F3にとって実習を通した保育者との出会いが、保育職への動機づ

けを高めることにつながっていた。実習を通した保育者との出会いは、保育職の現実体験と関係構築の機会になり、出会いの在り方が、実習内容の質に大きな影響を与える(谷川, 2010)とされる。そのため、実習園と養成校との協働的な実習体制の構築が必要になると推察される。また、「地元での関係づくり」では、B7から、地元で実習を行うことで保育者との関係が就職後もつながっていくことの良さが語られた。教職に関しては7割が地元で就職し、地元志向の強い職業(山田, 2022)とされ、保育職も同様の傾向にあると想定される。養成校は地域における人材育成の役割も担っていることから、実習園を含めた地域の保育・教育施設との連携や協働は、今後も重要になってくるだろう。

- ・保育所実習で出会った先生にすごく憧れというか。すごくいい先生に恵まれて、実習をその先生のもとでさせていただいたのが、私の中ですごく保育士になるきっかけになったのすごく印象的です (F3さん)。
- ・地元っていうのは、結構強みはあります。(中略) 実習もここに行っただけじゃって話したら、誰々先生おったとか。(就職してから)一緒に働いている先生とかもいてそれで話ができたり。地元によっぽ実習に行けたのが良かったかなと思います (B7さん)。

そして、実習先での実地体験活動では、「子どもとの関わり」、「実際の保育者の姿」、そして「園生活の流れの理解」に分けられた。D6からは、実習とは異なり、時間帯や時期を選びながら継続的に参加する実地体験活動だからこそ、そのときの子どもや保育者の姿、実習園での生活の流れを実際に学ぶことができたことの良さが語られた。

- ・経験していてよかったのは実地体験(活動)。生の子どもの姿と働いている人の姿を見る機会をいっぱい持てたのはよかった。午後に行くときもあれば、午前に行くときもあったり。だから園の生活というカリズムが分かったかなっていうのもあります。(中略) 例えば冬になると、就学に向けた部分も大きくなってきたりして、初めて知ったことだったので学んだところかな (D6さん)

2. 保育職に必要な知識・技術

初めに、該当する発話内容を誰にまたは何に対する知識・技術か、対象別に分類し、次に各対象で類似する発話内容をまとめカテゴリー化した(表3)。なお、保育所保育指針解説(厚生労働省, 2018)において、6つの知識・技術ⁱⁱⁱが示され、保育者の専門性として位置づけられている。本研究ではその分類を参考にとどめ、保育経験年数や保育実践の状況から語られる具体的な知識・技術の内容を抽出し、カテゴリー名とすることにした。

知識・技術の対象は、子ども、保護者、保育者、そして保育全般に分けられた。発話数は子どもに対する内容が最も多く、次いで保護者であった。森本ら(2016)の結果においても、保育者として必要な力に関する回答数では、「子ども理解」が最も多く、次いで「保護者との関係作り」であることから、結果は概ね一致していた。

初めに、子どもに対する知識・技術については、「発達や育ちに対する理解」、「一人ひとりの発達や姿に応じた関わり方」、「子どもの位置の把握」、「子どもの発達に応じた言語表現」、「遊びのレパートリー」、そして「保育表現や保育教材の活用」の7つに分けられた。そのうち、「発達や育ちに対する理解」、「一人ひとりの発達や姿に応じた関わり方」、「子どもの位置の把握」は、保育活動や場面に関わらず子どもと関わる際に必要となる理解と援助の知識・技術といえる。保育経験年数をみると、比較的保育経験の浅い保育者から語られていることがうかがえた。これらは、実際の子どもの姿を通して獲得されるものであるため、子どもとの出会いが少ない若手保育者にとっては、J1やI2の語りにあるように、子どもの気持ちや思いを読み取ることや、気持ちや思いに応じて援助することに難しさを感じることも多く、保育者としての必要な知識・技術と認識されるのだろう。

また、「子どもの発達に応じた言語表現」は、D5やA7の語りから、特に活動を始める際に、クラス集団に対して活動の流れや内容の説明する場面が必要となる保育者の言語表現に関する知識・技術といえる。保育の質に関する評価スケールSSTEW(Siraj, Kingston, & Melhuish, 2015 秋田・淀川沢 2016)では、子どもと保育者とのコミュニケーションに関する評価項目に、「子どもたちの年齢や能力に応じて適切な言

葉を用いている」や「子どもが理解できない言葉を多く使っている」が含まれており、保育者の適切な言語表現は、保育実践の質を評価する重要な指標となっている。保育経験年数をみると、1年目から7年目までの保育者から語られており、子どもの発達に応じて言葉を選んだり、分かりやすく説明したりする技術の習得には、ある程度の保育経験が必要になると考えられた。

そして、「遊びのレパートリー」と「保育表現や保育教材の活用」は、特に遊びや活動の展開において必要なもので、保育者が子どもと一緒に歌や言葉に合わせて行う身体的表現とそれを支える道具としての保育教材の活用の知識・技術である。通常、手遊びやペープサート等は、遊びや活動の導入時に用いられることが多い。H3の語りからは、手遊びやペープサートが、子どもと保育者の関係づくりのきっかけとして用いられており、保育表現や保育教材は、子どもと保育者の関係構築における道具的役割を果たしていることがうかがえた。

次に、保護者に対する知識・技術については、「保護者と話す態度」と「保護者への子どもの姿の伝え方」に分けられた。「保護者と話す態度」は、保護者と話を密にしたり、話しやすい雰囲気を意識したりするなど、コミュニケーションに必要な態度に関する知識・技術といえる。一方、「保護者への子どもの姿の伝え方」は、保護者とのコミュニケーションの内容に関するもので、特にD2, D5, C6の語りからは、園だよりや連絡帳等を通じた文章における伝え方に関する知識・技術が挙げられ、他方、E4, H5, A7の語りからは、口頭での伝え方に関する知識・技術が挙げられた。保護者とのコミュニケーションと一言でいっても、保護者が話しやすい態度や雰囲気づくり、また子どもの姿のどこをどのような方法で伝えるかなど様々な知識・技術が必要となることがうかがえた。

最後に、保育者および保育業務に対する知識・技術については、それぞれ「保育者とのコミュニケーション」と「文章力」が挙げられた。「保育者とのコミュニケーション」では、F3の語りから、特に保育者の人数が多い場合や入れ替わりがある場合、子どもに関する伝達事項を欠かさないためにも保育者間の連携の知識・技術が必要となる。「文章力」では、先述の保護者に対する知識・技術における「保護者への子ども

表3 保育職に必要な知識・技術

対象	具体的な発話	回答者	カテゴリー
子ども	いっぱいあるんですけど、まず子どもをみるにあたって1番難しかったのが見取れないっていうことで。子どもの気持ちってこうだろうなって思って援助するんですけど、それを反省のときに言ったら、「それって本当にそうなのかな」と先生に言われて。	J1	発達や育ちに対する理解
	一番は、子ども理解。発達段階とかの理解がすごく大事（中略）。発達障害とかだけじゃなくて、子どもが持つとる特性を理解するって、なんかすごく難しいなと思うので。そこを、いろんな子どもを見て勉強するし、本があったらそういうのも読んで理解していきたいというのは一番に思います。	I2	
	乳児を担当することが多いので、身体を育てていくっていうことが、すごく私にとっては印象的で、幼児まで体づくりは課題ではあるかな（中略）。身体の育ちの理解、順序とか。その子に必要な力とかを理解することが、設定を作るきっかけにもなるかなと思うし。遊びもそうなんですけど。環境だとか、遊びをどうするかとか。	C6	一人ひとりの発達や姿に応じた関わり方
	子どもの発達は、何歳を（担当）するでも、5歳やのに3歳の支援をしとったら、幼過ぎるし、小学校に行って、その子たちが苦勞する（中略）。その子に合わせた発達。大体の基準がある中でそれに近づけていくためにみたいなのは必要になって思いました。	H3	
	やっぱり、4年間で一番は子どもに寄り添って、気持ちを受け止めて声掛けとか、関わり方を工夫すれば、子どもたちも心を開いてくれて、一緒に楽しく過ごせるかなって思う。（中略）子どもと一緒に楽しく保育していくことが大事だなって。	E4	子どもの位置の把握
	広い視野、園庭の広い中で、子どもがどこにおってとか（中略）。十何人が園庭のいろんな所で遊んどって、誰がどこにおるか把握しとかないといざというときに困るかなって思っ、大体の位置は把握しとかないかなって。	H3	
	活動を始める前には説明があるじゃないですか。何をするとか。それを聞かせるのでずらすごい時間がかかるので。まず手遊びから始めてみんなが向いてくれたら「よく向いてくれた」とか認める言葉かけ。	J1	子どもの発達に応じた言語表現
	この2年ぐらいは、声かけをすごく意識しているの。その自分の言い回しだったり、語彙力だったり、なんかそういうところが、すごく問われるというか。求められるところなのかなと感じています。（中略）端的に分かりやすく、話もダラダラ続けないっていうのも意識して。	F3	
	ひな祭りってこういうスタートでこういう起源があって、こういう行事なんだよっていうのを話すときも、年長さんに話すように話して年中さんに話して分かるかっていうと違うので、かみ砕いて言わなきゃいけないかったり。長い話は子どもは聞きたくないし、やっぱりしゃべる力がないとしんどい。	D5	保育表現や保育教材の活用
	子どもに分かりやすい言葉選びとか、朝の会みたいな感じで、朝みんなが集まったりするときの話をしたりとかするときも、何てうまく説明したらいいかなみたいな思ったり。	A7	
保護者	毎日、保育。毎日、子どもは来るので何して遊ぶかなみたいなどころの引き出し（が必要）。	A7	遊びのレパートリー
	手遊びとか、ペープサートとか、子どもを引きつけるもの、保育教材とか（中略）年度の最初とかは、子どもとの信頼関係もできてないし、子どもも、私たちを試したる状態、この先生はどんな先生なんやろうみたいな（中略）先生のところ行くみたいない感じにできる、一つの道具かなって思ってます。	H3	
	保護者の方との連携だったり話を密にするっていうコミュニケーション能力がすごく大切で。私もそんなにコミュニケーションが上手なほうではないので、すごく1年目から苦勞したところで大事にした。	F3	保護者と話す態度
	保護者（とのコミュニケーション）ですかね。子ども相手っていう印象だと思うんですけど、子どもがいたら保護者も付いてくるんで、絶対。やっぱり話をするのは保護者が多いです。（中略）面接みたいになりたくないというか、あくまで人と人で喋ってる感じで聞き出したい。	B7	
	保護者対応の中に言葉遣い（中略）。おたよりというか連絡帳、話すほうが、受け止め方が違うじゃないですか、文で書いたのってそこでちょっと食い違った伝わり方になったこともあって。	I2	保護者への子どもの姿の伝え方
	特に担当のお子さんの保護者とは連携、情報とかを密に共有するようには意識してて（中略）。子どもさんが障害持たれてるという場合、不安になってるところもあると思うので。プラスに捉えられるように、でもしっかりとりのままの姿は伝えていきたいので、言葉を選びながら対応する。	E4	
	大きく言うとコミュニケーション能力。例えば保護者に対しても、その子の今日の様子とかを限られた時間の中でお迎えとかの短い時間の中で具体的に話さないといけない（中略）。字がいっぱいのお手紙を保護者も読みたくなじゃないですか。いかに伝えられるかっていう、その伝える力。	D5	文章力
	あと、コミュニケーション能力。同僚の人とでもそうだし、保護者とも毎日会うので、言い回しもすごい大事。子どもが壁に絵を描いてしまっ、それをどう伝えるかみたいな。	H5	
	（園便りでは）受け取り方もいろいろだと思うので、保護者の方の性格によっては同じことを伝えたいっていう内容でも、書き方を配慮したりだとかっていうことが必要。	C6	文章力
	幼稚園なので、子どもだけじゃなくて、保護者とも関わる人が多いので、保護者とのコミュニケーション能力も必要になってくる（中略）。なるべく普段から、今日こういうことがあってこれできるようになったんですよとか、そういうこともなるべく伝えるようにしている。	A7	
保育者	乳児と幼児で、まず変わってくるかなって思うんですけど。乳児の頃は、すごく担任の先生が多い分、大人同士のコミュニケーションもすごく大切だなって感じていて。先生の入れ替わりとか、午前と午後で先生が代わるとかも多くて、伝達事項とか、子どもの様子とかも伝達をすごく大切にしていた。	F3	保育者とのコミュニケーション
	一緒に保育士さんと働いていく中でも、コミュニケーションをうまく取っていったり、先輩保育士からいろんな楽譜とか手遊びとかを教えてもらったりしながら、そういう人付き合いというか。そういう能力も、保育士には子どもだけじゃなくて、周りの人とのコミュニケーション能力も必要になってくる。	E4	
保育全般	文章構成力。主担任をしていて大事だと思ったんですけど、指導案、クラスだより、研修の報告書とか、文章を書くことがいっぱいあって。そのたび1年目のとき園長先生がすごい厳しい先生で、一言一句丁寧に直されていたので、大事だと思いました。	G3	文章力
	（園便りでは）文章の量が限られてたりもするので、要約すること必要だなと思いましたし。	C6	

の姿の伝え方」と同様に、何をどのように書くか、適切な表現かを意識することが求められる。保育教諭養成課程研究会（2016）が行った養成校学生と新規採用教員等対象の実態調査の中で、在学中に学んでおけばよかった内容として、文書作成が挙げられている。園だより、指導案、報告書はそれぞれに文書としての目的や書式が異なるものの、他者が読むものであることから、G3の語りにあるように、文章構成力や適切な文章表現等の知識・技術が求められる。

3. 養成教育段階で学ぶべきこと

養成教育段階で学ぶべきことには、保育職に必要な知識・技術が含まれる。そのため、該当する発話内容は、先述の保育職に必要な知識・技術のカテゴリーをもとに分類し、カテゴリー名は発話内容に応じて一部修正した。学ぶべきこととしての特有の発話内容はそれぞれにコーディングとカテゴリー化をした（表4）。

表4 養成教育段階で学ぶべきこと

内容	A7	B7	C6	D6	E4	F3	G3	H3	I2	J1
保育者としての身体表現・言語表現		○			○	○			○	○
保育表現や保育教材の理解と活用							○	○	○	
一人ひとりの発達や姿に応じた関わり方	○				○			○		
発達や育ちに対する理解		○	○			○				
保護者対応									○	
理論を実践と関連づける意識				○		○				

養成教育段階で学ぶべきことは、「保育者としての身体表現・言語表現」、「保育表現や保育教材の理解と活用」、「一人ひとりの発達や姿に応じた関わり方」、「発達や育ちに対する理解」、「保護者対応」、そして「理論を実践と関連づける意識」の6つに分けられた。そのうち、「保育表現や保育教材の理解と活用」、「一人ひとりの発達や姿に応じた関わり方」、そして「発達や育ちに対する理解」は、森本ら（2016）や保育教諭養成課程研究会（2016）で示された在学中に学んでおけばよかった内容とおおむね一致する。「保護者対応」は、保育職に必要な知識・技術では回答数が多かったものの、学ぶべきことの回答は、I2のみであった。これは、保育実践で必要になる知識・技術と養成教育で学ぶべきこととのつながりについて示唆している。保育ニーズが多様化する中で、保護者対応の重要性は増している。しかし、養成教育段階で「保護者対応」を学ぶ場合は、事例検討や映像視聴などが中心となり、実習や実地体験活動においても体験的な学習は

難しい。保育所保育指針（厚生労働省、2018）では、子育て支援の留意事項として、保育所全体の体制構築に努めることが記載されており、保育現場では保育者同士の連携のもと保護者対応が行われている。そのため、保育職の知識・技術としての必要性が高いと認識していても、養成教育段階で学ぶべきこととして挙げられなかった可能性が考えられる。

「理論を実践と関連づける意識」は、養成教育段階で学ぶべきことの特有の語りとして、D6の語りから、大学で学んでいることが保育現場でどのように役立つかイメージしながら学ぶことの重要性が挙げられた。また、F3の語りからは、保育制度に関する学習をもっとしておくべきだったことが挙げられた。F3は、保育の基本と自身の保育実践を照らし合わせながら振り返ることの重要性を感じており、保育者として学び続けることの必要性を見出していることがうかがえた。森本ら（2016）においても、保育の仕事の実態をイメージ化させるための授業の工夫や実習以外での授業と実践の統合の場の必要性が指摘されている。今後は、実習先で体験的に学んだ子どもの姿や実践について、大学の講義や演習等でも継続的に取り上げ、実践と理論を関連づけたり、統合させたりする機会を増やしていくことが必要である。

- ・ 乳児保育とかだったのかな（中略）。現場に出たらもっとその症状からこういう病気かもしれないか、こうしたほうがいいのか、とっさに考えなきゃいけない時が多かったんですけど、やっぱり全然そこリンクして考えてなくて。学んでることがどう現場で役に立つかのイメージ全く持たずに何となくテストのためだけの勉強をしてたので。（中略）現場で働く自分のビジョンを持って勉強していくほうがよかった（D6さん）。
- ・ 保育制度のこととかが、自分の問題かもしれないけれど。なんかもっと勉強できたらよかったなと思っています。（中略）保育の基となるところ、大事にしたいところはほんとに全国共通であると思うし。そこはすごく大切にしたいところ。自分の保育を振り返って学んでいかなきゃいけないなって思う（F3さん）。

以上のように、養成教育段階で学ぶべきことについては、保育職に必要な知識・技術に挙げられた内容と

おおむね一致していたが、「保護者対応」についての語りは少なかった。「保護者対応」については、複数の保育士資格関連科目に学習内容として含まれているが、実際には、入職後にそれぞれの職場で同僚保育者や園長・所長等の指導のもと学びながら身につけていく知識・技術であるところが大きいだろう。したがって、保護者対応に関する学習では、入職後に実践的かつ経験的にその知識・技術が習得されることを踏まえ、養成教育段階で最低限学ぶべき内容を設定していくことが必要である。例えば、保育職に必要な知識・技術として挙げられた「保護者への子どもの姿の伝え方」のうち、園だよりや連絡帳等の書き方や文章での適切な伝え方については、養成段階で学習することは可能である。

まとめと今後の課題

本研究は、卒業生による教育内容や学習環境に関する評価から、本学の養成教育の特徴や強みを明らかにし、これまでの養成教育の成果と今後の課題について考察した。ここでは、本研究の成果をまとめ、今後の保育者養成カリキュラムの構築に向けた視点を述べる。

まず、本学で保育を学んでよかった内容や経験から、大学の授業等では、実践性の高い学習内容と保育・教育の理論的な学習内容が提供され、加えて学習環境として、コース間、コース内の学生同士の学び合いの機会が提供されていることが示された。また、体験的な学びの場である実習や実地体験活動では、子どもや保育者と出会い、地域の人材としてつながる契機になっていることが示された。これらは、これまでの本学の養成教育の特徴や強みとして位置づけることができる。今後は、これらの特徴や強みをふまえ、カリキュラム・マップの作成や4年間の学びの体系化を図る手がかりにすることができるだろう。

次に、保育職に必要な知識・技術と養成教育段階で学ぶべきことから、両者を照らし合わせることで、保育現場における知識・技術の必要性和、養成教育における準備性との視点から、保育者養成カリキュラムを考えることの重要性が示唆された。今回の調査では、「保護者対応」について、保育職に必要な知識・技術として6名の保育者が挙げたが、養成教育段階で学ぶべきこととして語ったのは、1名の保育者のみで

あった。「保護者対応」は、複数の保育士資格関連科目の学習内容として含まれているが、実際には、入職後にそれぞれの職場で同僚保育者や園長・所長等の指導のもと学びながら身につけていく知識・技術であるところが大きい。したがって、保護者対応や関連する子育て支援の学習では、入職後に実践的かつ経験的にその知識・技術が習得されることを踏まえ、養成教育段階で最低限学ぶべき内容を設定していくことが必要である。例えば、今回の調査で示された保育職に必要な知識・技術の「保護者への子どもの姿の伝え方」のうち、園だよりや連絡帳等を通じた文章における伝え方に関する知識・技術は、養成教育段階である程度の基本的な理解と習得が可能であると考えられる。保育者養成カリキュラムの学習内容は極めて多岐に及び、関連科目間の相互関連性の不在（小川，2013）も課題となっている。決められた修業年限の中で、高度な専門職を育成するには、科目ごとの到達目標だけでなく、保育職として卒業時まで身につけるべき専門的知識・技術の内容とその到達度を明確にし、保育者養成カリキュラムに位置づけていくことが必要である。

今回の調査では、保育経験年数が1年目から7年目までの保育者が対象であった。保育者には、キャリアステージに応じた役割や成長があり（保育教諭養成課程研究会，2016）、その進捗に伴い必要な知識・技術は変化していく。保育者養成は完成教育ではなく、保育者としての専門的知識や技術の基礎を学ぶ期間であり、卒業後も学び続ける土台作りの時期である（倉盛・上山・光本・渡邊，2021）ことを踏まえ、保育者のキャリアステージを見通し、学び続ける保育者の育成を目指す保育者養成カリキュラムの構築が必要である。

最後に、今後の課題を述べる。今回の調査では、保育所、幼稚園、こども園に勤務する卒業生を対象にし、保育施設特有の知識・技術と養成教育との関連を検討したため、児童養護施設や障害者支援施設等に勤務する卒業生が含まれていない。保育者養成課程のカリキュラムの構成のベースに福祉が意識されており（青木，2017）、養成教育における福祉と保育の科目の整合性を図ることや、保育所・幼稚園における実習と施設実習における学習内容の関連づけ、体系化といったことが必要になってくる。今後は、児童養護施設や障害者支援施設等に勤務する施設保育士に求められる特有の知識・技術を検討するとともに、養成教育におけ

る学びを精査する必要がある。

注

- i 福山市立大学教育学部児童教育学科は教育コース（定員50名）と保育コース（定員50名）から構成されている。教育コースは小学校教諭一種免許，幼稚園教諭一種免許，特別支援学校教諭一種免許の取得が可能となっており，卒業生・修了生は小学校教諭や特別支援学校教諭，社会福祉施設職員など保育・教育分野への就職をしている。
- ii 保育コースでは，各実習後にさらなる実践の指導力を育成する場として，保育活動に補助的に関わることのできる実地体験活動がある。
- iii 保育所保育指針解説では，①子どもの育ちを見通し，成長・発達を援助する技術，②生活援助の知識・技術，③保育の環境を構成する技術，④遊びを豊かに展開するための技術，⑤子ども同士，子どもと保護者等の関係構築の知識・技術，⑥保護者等への相談助言の知識・技術が示されている

引用文献

- 青木 紀 (2017). ケア専門職養成教育の研究－看護・介護・保育・福祉 分断から連帯へ－ 明石書店
- 保育教諭養成課程研究会 (2016). 幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅡ－養成から現職への学びの連続性を踏まえた新規採用研修－. 平成27年度文部科学省委託「幼児期の質向上に係る幼児教育等の推進体制等の構築モデル調査研究」報告書. http://youseikatei.com/pdf/20170927_1.pdf (情報取得2022/10/10)
- Howes, C., Phillips, D.A., & Whitebook, M. (1992). Thresholds of Quality: Implications for the Social Development of Children in Center-based Child Care. *Child Development*, 63, 449-460.
- Huttenlocher, J., Vasilyeva, M., Cymerman, E., & Levine, S. C. (2002). Language input and child syntax. *Cognitive Psychology*, 45, 337-374.
- 川俣 美砂子 (2012). 保育者養成課程におけるカリキュラムの比較分析－大学・短期大学・専門学校に焦点をあてて－ 福岡女子短大紀要, 77, 15-26.
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 倉盛 美穂子・上山 瑠津子・光本 弥生・渡邊 眞依子 (2021). 保育者志望学生に求められる専門的力量－実習指導経験のある保育者への調査を通じて－ 福山市立大学教育学部研究紀要, 9, 21-30.

- 森本 美佐・林 悠子・東村 知子 (2016). 卒業生の保育実践能力に関する自己評価から見た保育者養成校としての課題 奈良文化女子短期大学紀要, 43, 159-165.
- 両角 亜希子・長島 万里子 (2019). 保育者養成校の教育内容に関する実証的研究－四大化は質の高度化につながっているのか－ 大学経営政策研究, 9, 1-18.
- 中西 さやか・傳馬 淳一郎・小尾 晴美 (2019). 4年制大学における保育者養成カリキュラムに関する検討 社会保育実践研究, 3, 37-45.
- 丹羽 さかの (2011). 保育士養成課程の課題に関する一考察－4年制大学における保育士養成課程の課題について－ 研究年報, 16, 26-38.
- OECD (2006). *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*. OECD Publishing. (星 三和子・首藤 美香子・大和 洋子・一見 真理子 (訳) (2011). OECD保育白書－人生の始まりこそ力強く 乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較－ 明石書店)
- 小川 博久 (2013). 保育者養成論 萌文書店
- Siraj, I., Kingston, D., & Melhuish, E.: *Assessing quality in early childhood education and care: Sustained shared thinking and emotional well-being (SSTEWS) Scale for 2-5 year-olds provision*, London: IOE press, 2015. (シラージ, T., キングストン, R. M., メルウイッシュ, D., 秋田 喜代美・淀川裕美 (訳) (2016) 「保育プロセスの質」評価スケール 明石書店)
- 清水 益治 (2019). 保育者養成者のおかれている現状と課題－実践者と共に創る保育者養成－ 保育学研究, 57, 140-149.
- 高澤 健司・山田 真世・上山 瑠津子・田丸 敏高 (2018). 若手保育者の成長過程に関する基礎的研究 福山市立大学教育学部研究紀要, 6, 55-66.
- 谷川 夏実 (2010). 幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容 保育学研究, 48, 202-212.
- 山田 真紀 (2022). 教師のリクルートと移動パターン－地域的多様性と20年間の経年変化に注目して－ 椋山女学園大学教育学部紀要, 15, 221-232.

謝辞 調査にご協力くださいました卒業生のみなさまに感謝申し上げます。

付記 本研究は，2021年度福山市立大学重点研究助

成を受けて実施された。

(2022年10月18日受稿, 2022年11月24日受理)

Achievements and Issues in Early Childhood Practitioner Training Education at Universities: An Interview Survey with Graduates Working in Childcare Facilities

UEYAMA Rutsuko⁽¹⁾, YAMADA Mayo⁽¹⁾, MORI Michiyo⁽¹⁾, YAMANISHI Masaki⁽¹⁾, and YOSHII Ryo⁽¹⁾

This study clarified the characteristics and strengths of Fukuyama City University's nursery school teacher training education based on graduates' evaluations of the curriculum and learning environment, and examined our training education for achievements and future issues. Ten graduates working in childcare facilities were interviewed. The results indicated that the university provides highly practical and theoretical learning content in its classes, and that students have opportunities to learn from each other. During the practical training and field experience activities, they had opportunities to meet children and nursery school teachers. It was suggested that it is necessary to set a minimum curriculum to be mastered in the training education stage, taking into account that some specialized knowledge and skills are acquired, both practically and empirically, only after employment.

Keywords : graduates, curriculum for early childhood practitioner training education, expertise and skills, and educational contents.

⁽¹⁾Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University

